

私はソーシャルワーカー

社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士：宮元 預羽

「ソーシャルワーカーは何をしている人達なのか」

この度、当協会より原稿依頼を頂きました宮元と申します。「自由に書いて下さって結構です」とのことでしたので、色々悩んだのですが……。2,500字～3,000字……。せっかくの機会ですので投稿させていただきました。私の母親と姉2人は看護師なのですが、なぜ私が、母親や姉2人のように看護師にならず、ソーシャルワーカーになったのか？少し振り返ってみることにしました。そして振り返るついでに、今の私の立ち位置と重なる？青春時代を思い出したので、反省も込めて、若き時代より、つらつらと書き連ねてみました。

私は高校時代、バスケットボール部に所属していました。今から20年程前の話です。私の所属していたバスケットボール部はシード校でしたので、地元の沖縄では強豪校だったと思います。柔道をしていた今は亡き父親からは、「お前は背が低いから卓球をやりなさい」（←なぜ卓球だったのか？父親に聞けず仕舞い）、また、「バスケットボールを続けたければ高校卒業までに空手の黒帯を取りなさい。部活が終わったら走って道場に通いなさい。」（←人間の体力の限界というのを知り、月謝の数ヶ月分は新しいバスケットシューズ代に）と言われ続けたものです。私より体が大きく、厳格な父親だったのですが、背の低い私が背の高い連中の中でバスケットボールをすること、滑稽で不憫に思えた歪んだ親心？だったのでしょうか。結果的に私は、顧問の先生や女の子達からチャホヤされるようなスター選手になれなかったのですが、それでも好きであることだけで、高校の3年間バスケットボールを続け、控え選手を続けることができました。控え選手と言っても少しは試合に出場する訳です。背の高い新入生が入部して来たり、沢山の友人達が退部していきましたが、7名の登録選手として残ることができたのです。私にとっては快挙です。つまり、好きであることが“向いていない”ことに勝ったのだと思うのです。ソーシャルワーカーという職業を目指したことも、居やすい環境に身を置くことより、目指したい職業であった訳です。（今でも私は、ソーシャルワーカーの控え選手なのかも知れません……。）

さて、なぜ私は看護学校に行かなかったか。皆さんにとっては、どうでも良いことかもしれませんが、ここから少しずつ本題に突入していきます。高校卒業後、事情により親元を離れ、当時の老人病棟で夜勤専属の看護助手をしながら介護福祉士の養成校を出ました。養成校卒業後は介護老人保健施設で介護福祉士をしていた訳ですが、当時の私は、看護学校に行く環境はとても整っていたと思います。同僚や上司も看護学校進学を勧めます。働きながら進学する道も整っています。もし看護師になっていたら、ベテラン看護師である母親から助言などもして貰っていたことでしょう。姉達のように。また、もし看護師になっていたら、隣接していた精神科病棟の男性看護師達と草野球チームやサッカーチームに所属して真っ黒に日焼けをしていたり、イベントの時等は精神科の患者さん達の前で得意なバンド演奏なども披露、あるいは一緒に演奏していたことでしょう。そして私の働いていた老人保健施設には、複数の介護スタッフが看護学校へ通っていたのですが、施設の入所者達、御高齢の方々は、私には看護学校進学より大学進学を勧める訳です。高齢者達にとっての大学は、一つのステイタスであったのかも知れません。平成大不況の真っ只中、学歴社会も崩壊しつつ時、人生の大先輩達の助言を鵜呑みにし、施設内で一人、時代に逆行していた私は、働きなが

ら社会福祉専攻の夜間大学に通う道を選びました。辛くて弱音を吐いた時も「ヨハネ。ヨワネ（弱音）を吐くな」（←御高齢ギャグ？）とか、「働きながら大学に行くなんて当たり前だ。昔は皆、苦学して大学を出たものだ。」とか、その他「とりあえず大学」とか、高齢者らのそんな言葉に励まされたりもしていました。親元を離れて暮らしていた私にとって、まさに高齢者達は私の親代わりであり、また高齢者達も子や孫を私に投影していたのだと思います。（ここまででは、看護学校へは行かず大学に行った、ということで話がそれて終わってしまいますね。）

さてさて、それではなぜ私はソーシャルワーカーを目指したのか？ソーシャルワーカーが目指したい職業であったのか？これもほとんどの方々にとっては、もうどうでも良いことだと思うのですが……。当時の私は「ソーシャルワークとは何か」を、正直よく理解していませんでしたが、介護福祉士をしていたので「ソーシャルワーカーが何をしているのか」は、よく見えていました。例えば、ある事件において、被害者の視点に立ち、マスコミや国家権力？に対し、ソーシャルワーカー達がソーシャルアクションをおこす姿を見ていました。また、精神科の患者さんの処遇に対して、患者さんの視点に立ち、医師や行政に根拠ある意見を発言している精神科のソーシャルワーカーを見ていました。ソーシャルワーカーは、普段細々とデスクに向かう少数派で、患者さんや利用者とは静かに面接をする。しかしクライアントが困っている時はその環境を整え、誰に対しても言うべきことは言い、一貫した姿勢を見せる……。誠実性と正義感。それが私の見ていたソーシャルワーカーでした。当時の私はソーシャルワーカーに程遠い存在で、忙しさに感け、人の話を「聴く」姿勢も不十分で、同僚達が威圧的・感情的に意見をしてくたら、たとえそれが間違っていたとしても、すぐに謝ってしまっていました。他人の環境を調整する程のスキルが自分に身につくのか不安でした。だからこそソーシャルワーカーに憧れたのかも知れません。そして私は大学卒業後、生活相談員や介護支援専門員として、曲がりながらもソーシャルワークに携わることができました。

「離職者訓練制度における介護福祉士養成事業にソーシャルワークの視点を」

現在私は、介護福祉士と社会福祉士の養成に携わっておりますが、今まさにソーシャルワーカーの控え選手なのかも知れません。ソーシャルワーカーの控え選手？と反省するようになったのは、ある仕事に携わったことがきっかけでした。皆さんは平成21年の10月、朝日新聞の「介護系学校訓練生の波」というショッキングな記事をご存知でしょうか。介護福祉士の養成校に在籍する職業訓練生の記事で、「半数はまじめな訓練生」なのだが、一部に「介護分野で働く気のない人まで集まった」「失業手当が目当て」「介護の仕事内容を知らない人まで受講している？」との内容でした。ここで誤解して頂きたいのが、半数以上はまじめな訓練生であることです。（一部の訓練生の評判で、まじめな訓練生達が実習先で悲しい思いをしていたのを私は知っています。）その記事の1年後、私自身がその訓練生達に介護教員として携わることになったのですが、沢山の訓練生が退学してしまいました。訓練生に対しソーシャルワークを行う環境も整っておらず、私自身もソーシャルワークを行う力量がなかったことを反省しております。平成22年度の調査では、介護福祉士の養成校の2割以上が職業訓練生や介護雇用プログラムの求職者であり、今後その数は更に増え、彼らに日本の将来を託すのが現状です。彼らと関わり、不完全燃焼のまま2年が経過してしまいましたが、今後は少し離れた場所で、離職者訓練制度における介護福祉士養成事業のソーシャルワークとは何か？を追求していきたいと考えております。

現在の所属：大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科助教（実習担当）